

日常会話の論理と認知 — ゲイ・ブッシュマンの社会から —

菅原和孝

京都大学総合人間学部

sugawara@gui.ic.h.kyoto-u.ac.jp

はじめに

この報告では、人類学的な日常会話の分析にかかわるいくつかのトピックを取りあげて、それらを方向づけている基本的な理論と関心を素描する。分析の詳細は別に出版されているのでそちらを参照されたい。ここにしるすのは口頭で発表した内容の要旨であるが、時間の制約で詳しく論じることのできなかった方法論的な背景と今後の展望をつけ加えた。

1 人間行動の自然誌的記述

知的生命体が「社会的に行為する」とはいったいどういう成り立ちをもった現象であるのか。この問いは人類学にかぎらず社会科学一般にとってもっとも本質的なもののはずである。徹底した正攻法でこの問いに挑んできたのは、動物行動学や霊長類学である。これらの分野のアプローチのなかには、コントロールされた実験環境を設定するものもないではないが、ファーブル昆虫記からチンパンジー研究にいたるまで、主要な発見はあくまでも比較的「自然な」状況における動物の行動を自然誌的に記述するという単純な方法によって成し遂げられてきた。そのことを思うなら、こと人間に関するかぎり、行動の自然誌的な記述が優位な方法論となってこなかったことはとても奇妙である。

もちろん動物行動学から派生した人間行動学 (human ethology) が重要な業績を積み上げてきたことは確かである。しかし、この分野の主要な関心は、ヒトの非言語的な行動のかなりの部分が、系統発生の過程で確立された生得的プログラムによって支配されていることを論証することに注がれた (Eibl-Eibesfeldt 1988)。そのことがおそらく、生物学的な決定論を嫌悪する「人文科学」のがわの「行動学」に対する警戒心を強めたのであろう。

人類学という分野に的をしぼるならば、1980年代以降、いわゆる「自然人類学」(もしくは人類進化論)と「文化人類学」の断絶はひどく深まってしまった。その理由は単純である。第一に、人間の社会的な行為はまさに文化的に構成されたものであり、「生物学的事実と社会学的(文化的)事実とは異質のものであり、人間社会は見かけはどうであろうと後者によって成立している」と断じられた(長島 1985)。第二に、ふつう人類学の調査者は、対象とする人々の言語をかなりの程度理解すべく訓練を積み重ねるので、いったん現地の人々と不自由なく会話ができるように

なると、お気に入りのインフォーマントの「打ち明ければなし」やシンボルに定着された「表現活動」こそが、文化と社会の本質を見抜く「魔法のレンズ」であると確信されるのである (Moerman 1988)。とくに、解釈学的な人類学においては、人類学者と現地の有力なインフォーマントとの濃密な「対話」から非明示的なしかたで得られた直観と洞察が巧みに配列され、文化という「テキスト」の「批評」として提示されることになる (ギアーツ 1987)。そのとき、現地の人々自身が相互にどのように行為しあっているのかという側面は不思議なまでに無視される。

この無視にも単純な理由がある。人と人の相互行為のもっとも主要な形態として「会話」がある。だが、「会話」という現象それ自体を直接的に「観察」することは殆ど不可能なのだ。端的に言って、それは人間の認識能力にとって「複雑すぎ」しかも「速すぎる」。それはもちろん母国語の会話でも同じである。

この断言は奇妙に聞こえるかもしれない。われわれはふだんつつがなく会話しているからだ。だが、われわれはそのとき会話を「観察」したり「認識」の対象に据えたりしようとしているわけではない。単にわれわれはそれを「生きて」いるだけである。会話の微視的な「観察」は録音 (録画) / 再生という技術の助けを借りて初めて可能になった。それゆえ、会話というヒトの種特異的な社会行動を自然誌的に記述するという企ては、現代の科学技術にかなりの程度依存したものであることまず認めておく必要がある。

ありのままの会話を「観察」するという方法は、エスノメソドロジーとよばれる社会学の一領域において初めて開始された。これは「会話分析」(conversation analysis) という独自の分野となって現在に至っている。この報告で素描する私の研究はこの「会話分析」と深い類縁関係をもっているが、少なからぬ隔たりもある。「会話分析」の立場にたつ欧米の研究者の主要な関心は会話の形式的構造や時間的シークエンスの質的な特性を明らかにすることに注がれているようである。しかもその根底には、社会的行為の全側面は、参与者の心理や人格からは独立した「慣習化または制度化された構造的組織として検討しうる」(Heritage 1984) という前提が横たわっている。このような理論的前提の帰結であるのかどうか定かではないが、多くの「会話分析」の論文が素材とするのはごく短い会話の断片であり、参与者たちの社会関係がいかなるものであるかはまったく明らかにされていない。さらに、かれらが抽出しようとする「構造的組織」なるものがどの程度の通文化的な多様性をもっているのかも議論されることはまれである。

このような「会話分析」への不満をはらすために、私は、つぎのようなことを「人類学的な日常会話の分析」の基本的な戦略としたい。固有の文化的な文脈において、ある社会関係をもって出会う人々のあいだで生じる「できごと」を分析の準拠単位とする。そこで関心の対象になるのは、会話の構造的特性にとどまらず、発話の修辭的な方策、活性化される背景知や記憶、認知の動態、さらには参与者の戦略にまでおよぶ。ひとくちに言えば、その分析は「民族誌記述」と表裏一体のものとしてなされなければならない¹。

もちろん、このような立場設定は大きなリスクを伴う。われわれはある社会に特異な民族誌的

詳細に目をうばわれるあまり、「ヒトに種特異的な社会行動」の普遍的な成り立ちへと攻めのぼるという目標を果たしえない、という危険性がある。だが、その限界はおそらく、会話するヒトとしての自らの経験世界との比較によって、かなりの程度突破できるのではないかと私は楽観している。だから、「人類学的な日常会話の分析」は、異文化での分析と自らが生まれ育った社会での分析という両輪を駆動させることによって、はじめて真に「自然誌的な」人間行動の解明へと接近しうるであろう²。

以下では、このような研究戦略ととくに関わりの深い三つの理論をとりあげ、それをアフリカ南部ボツワナの狩猟採集民グイにおける日常会話の分析と突き合わせたい。

2 ギイ・ブッシュマン

ブッシュマンは南部アフリカのカラハリ砂漠の環境に古くから適応してきた狩猟採集民である。およそ 14 の言語集団が現存しており総人口は約 8 万人と推定される。その多くはボツワナとナミビアに居住し、農場や町で低賃金労働に従事しているが、1970 年代までは数千人の人々が原野のなかではほぼ自給自足的な狩猟採集生活を送っていたと推測される。わが国では田中二郎が 1967 年より、ボツワナの中央部に位置するセントラル・カラハリ動物保護区内のカデ地域に住むグイとガナという言語集団を対象にして生態人類学的な研究を続けてきた（田中 1971/1990）。この人々の生活は 1979 年より施行された政府の遠隔地開発計画により急速に変容した（田中 1986）。以下に検討する会話の資料は、1987 年から 1992 年にかけてカデ地域のグイの人々から収集されたものである。

3 会話の論理—グライスの公準は有効か？—

予備的な考察として、日常会話において人間が含意（言外の意味）を推論する仕組みを明らかにしようとしたポール・グライスの理論を参照し（Grice 1975）、グイの発話が「協調の原理」やそれに付随する「会話の公準」によってどの程度うまく理解できるかを検討した。分析の素材としてとりあげたのはいわゆる「アイロニカルな発話」と「婉曲な依頼（ベグging）」の二つである³。

まず、明らかにグライスの「質の公準」（偽りと信じることを言うな）に反していると感じられる発話は、「現実の事態の逆を言う」というアイロニーの特性と合致していることがわかる。ただしこれは一次的な解釈である。

つぎに私自身に対するきわめて婉曲なベグgingの事例を分析し、「協調の原理」を参照するだけでは、グイの発話者が「私に食物を乞うているのだ」という含意の正しい解釈に到達することは不可能であることを論じた。そこにジェフリー・リーチの提唱する「丁寧さの原理」を介在させるならば、一応は正しい解釈に達することができるが（リーチ 1987）、それほどまでに複雑な

推論過程が現実の相互行為のなかで起こっている参加者の理解のプロセスを正確に反映しているかどうかはきわめて疑わしい。

さらに、再びアイロニカルな発話の事例に戻り、じつはアイロニーの正しい解釈は単にその発話が「現実の事態の逆関数である」ことを認知することだけからは導かれないことを論証した。すなわち、固定的な原理にしたがって含意の推論がなされるという考えに固執するならば、われわれは、発話のそのつどの文脈にしたがって、アドホックに新しい「原理」を追加していかなければならないことになる。

このような袋小路を突破する方法は単純である。単文的な発話の解釈から「会話の論理」を抽出するという方法を破棄しさえすればよいのである。発話の理解とはつねに相互行為の運動を通じてなされている。もしグライスの理論になんらかの有効性があるとすれば、それは、一見して偽りとわかることを言うという行為が、相互行為の方向づけにとって特異な効果を発揮するという事実注意到を促したという点にある。そのような発話によって聞き手の注意はひきつけられ、そこからある特有な「かけひき」が話者と聞き手のあいだに生まれるのである。

4 連関性の認知 — 関連性理論との対照 — ⁴

スペルベル／ウィルソンの提唱した関連性理論 (Sperber & Wilson 1986) がコミュニケーションの理論一般にとって革新的な意義をもつものであることは、現在ではよく知られている。とくにその豊かな可能性として、つぎの三点を強調しておきたい。まず、この理論はコミュニケーションにおいて「受け手」が果たしている積極的な役割を正当に評価することを可能にした。第二に、「言語」をコミュニケーションのモデルとする偏見を廃し、身体的なふるまいを「顕示的なコミュニケーション」のもっとも始原的なタイプとして理解しなおすことを可能にした。第三に、(相互的な) 認知環境の改変という視点から「顕示的なコミュニケーション」をとらえる立場は、霊長類からヒトへのコミュニケーションの進化を統一的に把握するうえで有効であろう。グイの日常会話の分析との関係でもっとも興味をひくのは、スペルベル／ウィルソンが関連性には「程度」があると論じている点である。ある発話が関連性をもつことの必要十分条件は、それがなんらかの文脈効果をもつことである。文脈効果が大きいほど、しかも、それを発見するために費やされる「処理の努力量」が小さいほど関連性は高くなる。ここですぐさま問題になるのは、著しく冗長でしかも文脈にとって異質と思われる情報が混入する発話は、それを処理する「努力量」の増大に比例して、どんどん関連性を低くしてしまうということである。

そのような発話の例として、グイの並行的同時発話の一事例を検討した。グイの会話ではさまざまな局面で長く頻繁な同時発話が生じるが、その発話内容と文脈にしたがって「協調的」「対立的」「並行的」といったタイプに分類される。並行的同時発話とは、トピックそれ自体にはゆるやかな共通性が認められるものの、複数の参加者が著しく異なった内容を同時にしゃべるというも

のである。

4人の男性S、D、C、Kがいる。SがもっぱらしゃべりDはそれに相づちをうっている。その内容は以下のようなものであった。——バントゥ系農牧民カラハリ族（テベ）の子供はいつも良いものを食べているのですくすくと成長するが、グイの子は繊維質の多い原野の植物ばかり食べているのでなかなか大きくなり、たとえテベの子が年下でもすぐにグイの子の背丈を追い越し、「自分のほうが年長だ」と言ってグイの子を見下すようになる——。この応酬的な会話と大幅にオーバーラップしながら、Kは一見したところかけ離れた内容をしゃべりだした。Kは彼の発話がSとDの注意をひかないので、途中からCにむかって発話の方向を切り替えたようであったが、Cは終始沈黙していた。そのKの発話はつぎのようなものであった。

- (1) テベの青年Tはおれより年下なのに「自分のほうが年長だ」と言っておれをあきれさせる。
- (2) Tの父Hが初めてこの定住地に移住してきたころ、Hは多数のヤギを所有するガナの金持ちをだまして猟犬を売りつけた。
- (3) その猟犬はまったく無能で、全然獲物を追おうとしなかったので、そのヤギ所有者の息子と彼の友人とが、犬を殴り生き埋めにしてしまった。
- (4) そのころTは、まだほんの幼い子供であった。

このように、Kの発話は、(1)と(4)にかぎるならば、明確に関連性をもったものであった。つまり「テベの子」というカテゴリーの一事例Tにも、SとDの会話が提示する想定〔テベの子はグイの子よりも速く成長する〕があてはまることを示し、この想定「確からしさ」を強めるというはっきりした文脈効果をもっていた。だが、実際にはKの長広舌の主要な部分は(2)(3)のエピソードを詳細にわたって叙述することによって成り立っていた。もし、CがKの発話を忠実に聞いていたとしても、(2)(3)を処理する努力量の大きさは確実に文脈効果を上まわってしまったことだろう。

この分析から明らかになったことは、柔軟な説明力を具えたスペルベル／ウィルソンの理論でさえも、西欧的な言語理論にとりついている効率主義的な偏向から免れていないということである。つまり関連性理論は会話への参加者がいかに効率的に「わかりあうか」という課題の究明に注がれていたのである。これに対して私は、Kに典型的にみられるような発話態度を「自己中心的な連関性の追求」とよびたい。ここであえて「関連性」と区別して「連関性」という用語をもちいるのは、後者が、文脈効果よりももっと幅広い認知の「つながり」をも含む概念であることを強調するためである。

自己中心的な連関性の追求は一見したところ、会話をディスコミュニケーションのほうへ押しやってしまうかのようにもみえる。しかし、それは参加者の注意を再編成し、会話のトピックを非連続的に変化させる可能性をもっている。さらに、われわれ自身の会話行動と比較するならば、自己中心的に連関性を追求する志向性の根底には、会話のなかで刻一刻と活性化される記憶

をそのままことばへと外化し共有しようとする「欲望」が感知される。その「欲望」は、おそらくわれわれとグイに共通したものであるが、それを管理し統制する「制度化」の程度は文化に応じてきわめて多様であると思われる。

5 交渉の論理 — 言語行為とメタコミュニケーション — 5

グイの会話においてしばしば並行的な同時発話が生じ、しかもそこでは自己中心的な連関性が果敢に追求されるということばかりを強調すると、ある種の「オリエンタリズム」に陥る危険性がある。つまりグイの言語生活が「文明社会」のそれに比べて「混沌としたものである」と断じるような自民族中心的な偏向を生み出しかねないのである。そのような誤解を封じるためには、グイの日常会話においても、サックスらが定式化した「順番どりシステム」(Sacks et al. 1974)と合致するような発話ターンの交替がごく普通にみられるということを強調しておかねばならない。むしろ、文脈と社会関係の特性に応じて、スムーズな話者交替が卓越する相互行為のモードから、同時発話が頻発するモードへの切り替わりが起こると考えるべきであろう。

とくに自己中心的な連関性の追求が突出し、長い並行的同時発話が続くような相互行為のモードを「連関性の分岐」と名づけ、逆に参与者がある焦点に注意を集中し、スムーズな話者交替が優勢になるようなモードを「連関性の収束」と名づけた。後者の典型的な場合として、狩猟採集にかかわる情報が交換されるような会話をあげることができる。さらに、なんらかの実利的な目標を果たすためになされる「交渉取引」こそは、社会生活と経済関係を接合させるコミュニケーションの形態である。やや大げさに言えば、そこでは言語行為は「生存のための闘い」として機能するのである。交渉を組織するもっとも重要な言語行為は「要求」である。青年K（さきほどのKとは別人）が年長者Sに対して「おれがあんたのために作ってあげた鍬の代金を払え」と要求し、Sがその要求をのりくらりとはねつけていた事例を詳しく分析した。まずこの会話のすべての発話を単純な命題成分に書き直すことができた。それらの成分は次のような類型に分けられた。(イ) 関係または事態の叙述：この叙述は、Sによるものが4種類の系、Kによるものが3種類の系に区別できた。それぞれの系においては多数の命題成分が一貫した文脈に組織されて、スペルベル／ウィルソンの意味での「文脈効果」を発揮していた。しかも、その効果は、それぞれの系がになう〈主張〉〈反論〉〈威嚇〉〈非難〉〈弁明〉といった発語内的な力と結びついていた。(ロ) 直接的な発語内行為：その中心をなすのは言うまでもなく「払え」という〈要求〉と「払わない」という〈拒否〉であるが、そのほかにも〈質問〉→〈返答〉という隣接対に組織される言語行為が交渉の展開に重要な役割を果たしていた。(ハ) 仮に〈異議申し立て〉とよべるような発語内行為：これはSの言語行為としてのみ出現し、Kが想定するSとKの関係性それ自体に対して異議を唱えるというものであった。分析からもたらされた主要な発見は以下のようなものであった。まず相互行為の流れのなかで、それぞれの叙述の系は明瞭なまとまりをなして現われた。し

かもそれらはSの〈主張〉→Kの〈反論〉、Kの〈主張〉→Sの〈反論〉、Sの〈非難〉→Kの〈弁明〉というふうに明確な対応関係をもって交互に出現した。すなわち、この交渉において二人の参加者は高い論理的な整合性をもって、相互の言語行為を噛み合わせていたのである。

次に、Sの〈異議申し立て〉こそが、この交渉を持続させる原動力であったと思われる。典型的には、その場にいる「観客」にむかって「あいつはあんなことを言っている」とあきれてみせる。このとき目の前の相手であるKが、二人称から三人称に「降格」されて指示されたことは重要である。さらにもっと直接的に「おまえがおれに払えと言っていること自体がおれをあきれさせる」といった形で不審を露にし、ますますKをいきりたさせる。このような〈異議申し立て〉において、Sは「じつはおれのほうがおまえに貸しがあるのだ」という論拠をわざと伏せていたのである。このようなやりかたこそ、交渉の参加者が駆使する巧緻な「戦略」を例証するものである。最後に、以上のような分析にもかかわらず、この「交渉」がじつはなんら真剣なものではなく、単なる「ふざけあい」であった、という動かしがたい直感を吟味しなければならない。言うまでもなく、「交渉」をそれ以外のなにものかに変容させるメタコミュニケーションは、身体的なチャンネル（「身ぶり」「表情」「笑い」など）によって支えられている。さらにその基底をなすもっとも本質的な条件は、このような相互行為がつねに「観客の前で演じられている」ということである。言語チャンネルで生じている事柄をいかに精密に分析しても、そこから導きだされる論理的な整合性は、生きられる経験の感覚=意味を説明しえないのである。

だが、そのような「論理的な整合性」が、人間が言語を用いて「ふざけあう」ことを可能にする主要な「しかけ」をなしていることもまた確かである。なぜならある言明に対して即座に適切な応答を発するという形での「連関性の収束」を長時間にわたって持続するというそのこと自体が、言語的なやりとりを身体的な「殴り合いごっこ」と類比されるようなスリルにあふれた経験にするからである。

6 日常会話の理論はどこへいくのか — 展望にかえて —

会話を含むヒトの社会的行為の人類学的な探究は、今後どのような方向に展開するのであろうか。私なりの展望を最後に示しておきたい。

対面相互行為を自然誌的に観察し記述するという方法論は、あまりにも素朴な出発点であった。しかし私はその素朴さのなかにこそ、人間に対する新しい理解にとってもっとも大きな力が隠されていると信じたい。このような「信仰」に実質的な説得力を与えるためには、広い視野からの「理論化」の試みが不可欠であろう。

そのような理論化にあたって手放してはならない指針は、さまざまなレベルでの〈連続性〉を擁護するということである。まず、動物の社会行動と人間の社会的行為にかかわる認識論は連続的なものとして組み立てられるべきである。さらに、身体的な行為と言語行為の成り立ちとを統

一的に把握する視点を確保しなければならない。このような見通しは、当然、サル（自然）からヒト（文化）へのコミュニケーションの進化の過程のなかに断絶的な跳躍をみるというレヴィ=ストロース以来の社会人類学の伝統を疑うことを含意している。同時に、人間の営みの総体を「言語ゲーム」としてとらえ、この「ゲーム」には「外部がない」と断じるような思考法を鵜呑みにしないことが必要であると思われる（たとえば、橋爪 1985）。

私がどうしても得心がいかないのは、つぎのようなタイプの立論である。人間の行為は「自然史的な行為」と「社会史的な行為」とに分けられる。後者の中核にあるのは言語行為である。さらに言語行為を成立させているのは「構成的規則」である。ゆえに、「社会史的な行為」の探究にとってもっとも有効性が高いのは構成的規則の分析である（野家 1993）。だが、私は、「交渉」という「言語ゲーム」が「ふざけあい」という別種のゲームに変容してしまうそのことまでを構成的規則が支配しているとはどうしても思えない。むしろ構成的規則など（定義上）もっているはずのないイヌやサルが「ふざけあう」ことについて思索をめぐらす、グレゴリー・ベイトソンの「生態学」のほうにずっと豊かで柔軟な思索の力を感じる（ベイトソン 1986）。

こうした観点をとるかぎり、「ポストモダン人類学」によってあくなき攻撃の標的とされている客観主義や実在論に対して、ある程度のコミットメントを行なうことは避けられまい。たとえば、認知心理学のプロトタイプ理論をコネクショニズムと結合させたチャーチランドの実在論は、さきほど私が挙げた「連続性」の要請をすべて満たしているという意味で、悔りがたい説得力をもっている（チャーチランド 1997）。「ポストモダン人類学」の解釈学的傾斜に対する反動なのであろうか、近年、人類学に自然科学的な認識論を復権させようとする試みが続々と登場していることも興味ぶかい（たとえば、Samuel 1990, Kuznar 1997, Lett 1997）。関連性理論という大きな革新を成し遂げたスペルベルその人が「真の唯物論者であるためには？」というような問いを立てていることはたいそう刺激的である（Sperber 1996）。だが、このような潮流のなかには無視しえない混乱もみられる。たとえば、レイコフの認知意味論は、客観主義の解体を標榜しながらも、基盤実在論という原点は疑わないばかりか、「進化論」や「生理学」といった科学的説明をおのれの立論に有利な材料としてとりこんでいる（レイコフ 1993）。レイコフはコネクショニズムに対しては一定の敬意をはらっているようであるが、チャーチランドのほうはもっとあからさまに客観主義的である。つまり彼は、人間の「意識」の成り立ちを神経回路網のメカニズムによって説明しつくすことが、世界に対するわれわれの態度を根本的に変容させると予言しさえするのである。

ここで私が「混乱」とよんでいるのは、これらの論者たちが、思考の二つのありかた、すなわち「説明」と「了解」とをあまり自覚的に区別していないということである。私は「進化論」におのれがコミットせざるをえないと感じているが、進化論が「説明」の体系であることを忘れることはできない。つまり、「この私」はサルからヒトへの何百万年にわたる進化の帰結としていまここに存在しているのだという「真理」を「信じる」ことは、私が生きる直接的な経験世界の〈質〉をなんら変容させはしないのである。「私」の意識に生じる全事象が神経回路網の物質過程によっ

ていると「信じる」ことも同様である。

このように考えると、対面相互行為の自然誌的な観察という方法が、きわめてきわどい隘路を進んでいることがよくわかる。グイや日本人の会話を参与者自身の経験の流れに寄り添って追跡するとき、私は、人間的な意味世界の立ち現われを〈了解〉しようとしているのである。だが、その行為の時間構造や規則性を通文化的に比較したり、さらには霊長類の相互行為の構造と比較したりすることを企てた瞬間、私は客観的世界に係留された〈説明〉の原理を探し始めているのである。

かつてメルロ＝ポンティは「記述することが問題であって、説明したり分析したりすることが問題ではない」と断言した（メルロ＝ポンティ 1967）。だが、彼はけっして経験科学を無視したわけではない。逆に、その時代に入手可能であった心理学の業績を貪欲に吸収し徹底的に批判することが、彼にとっては主観と客観の二元論を超えるための唯一の道であったのだ（メルロ＝ポンティ 1964）。その後の半世紀に霊長類学や認知科学の分野では数々の驚くべき発見が蓄積されてきた。相互行為するヒトとしての自らの経験世界を〈了解〉するという作業も、これらの発見を受け咀嚼しなおすところから再出発するしかないのである。そうすれば、おのずから、メルロ＝ポンティがたどったのとは異なる道に分け入ることができるのではなかろうか。そのような希望をいだくかぎり、私は〈了解〉と〈説明〉のどちらかにみずからを禁欲することはできない。だが、両者を論理的に破綻のない形で融合させることができるのかどうかは、まだまったく未知である。そのような暗中模索の途上にあつて、数理科学者たちが「会話」という人間的な事象に真剣に取り組んでいることを知ったことは、私にとって大きな驚きであり励みであった。

注

¹ 日常会話の分析に基づくグイの民族誌は最近刊行された（菅原 1998a）。

² 日本人の日常会話については、私はとくに自己接触行動に注目して分析を行なったことがあるが（菅原 1987）、膨大な資料がまだ手つかずのまま残っているので、体系的な分析は今後の課題である。

³ この節の分析はすでにその概略が発表されているが（Sugawara 1996）、より詳しくは 1998 年中に刊行予定の拙著の第 1 章を参照されたい（菅原 1998b）。

⁴ 連関性にかかわる詳しい議論は別稿または近刊の拙著を参照のこと（菅原 1997a, 1998b）。

⁵ ここで紹介する事例以外にも、「道具を貸せ」という要求に対して「もっていない」という拒絶が返されたごく単純な「交渉」の事例も観察された。そこから、交渉の分析にとってキイになる〈ムーブ〉という概念が抽出された。詳しくは、別稿または近刊の拙著を参照のこと（菅原 1997b, 1998b）。

文献

ベイトソン、G. 1986（佐伯泰樹・他訳）『精神の生態学 上』思索社。

- チャーチランド、P. M. 1997『認知哲学 — 脳科学から心の哲学へ —』産業図書。
- Eibl-Eibesfeldt, I. 1988 Social Interactions in an Ethological, Cross-Cultural Perspective. In F. Poyatos (ed.), *Cross-Cultural Perspective in Nonverbal Communication*, Toronto: C. J. Hogrefe, pp. 107-130.
- ギアーツ、C. 1987 (吉田禎吾・他訳)『文化の解釈学 I, II』岩波書店。
- Grice, H. P. 1975 Logic and Conversation. P. Cole & J. L. Morgan (eds), *Syntax and Semantics Vol. 3: Speech Acts*, New York: Academic Press, pp. 41-58.
- 橋爪大三郎 1985『言語ゲームと社会理論 — ウィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン —』勁草書房。
- Heritage, J. 1984 *Recent Development in Conversation Analysis*. Coventry: University of Warwick.
- Kuznar, L. A. 1997 *Reclaiming a Scientific Anthropology*. Walnut Creek: Altamira Press.
- レイコフ、G. 1993 (池上嘉彦・他訳)『認知意味論 — 言語から見た人間の心 —』紀伊國屋書店。
- リーチ、J. N. 1987 (池上嘉彦・他訳)『語用論』紀伊國屋書店
- Lett, J. 1997 *Science, Reason and Anthropology: The Principles of Rational Inquiry*. Lanham: Rowman & Littlefield.
- メルロ＝ポンティ1964 (滝浦静雄・木田元訳)『行動の構造』みすず書房。
- 1967 (竹内芳郎・小木貞孝訳)『知覚の現象学 1』
- Moerman, M. 1988 *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 長島信弘 1985 「社会科学の陰喩としての家族」『現代思想』13-6: 148-157.
- 野家啓一 1993『言語行為の現象学』勁草書房。
- Samuel, G. 1990 *Mind, Body and Culture: Anthropology and the Biological Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. 1996 *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1986 *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Basil Blackwell.
- 菅原和孝 1997a 「会話における連関性の分岐 — 民族誌と相互行為理論のはざままで —」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社、213-246 頁。
- 1997b 「関係と交渉のプラグマティックス」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社、369-413 頁。
- 1998a『語る身体の民族誌 — ブッシュマンの生活世界 1 —』京都大学学術出版会
- 1998b(近刊)『会話の人類学 — ブッシュマンの生活世界 2 —』京都大学学術出版会

Sugawara, K. 1996 Some Methodological Issues for the Analysis of Everyday Conversation among the |Gui. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 22: 145-161.

田中二郎 1971/1990(第3版) 『ブッシュマン： 生態人類学的研究』 思索社。

——— 1986 「集住化・定住化にともなうの変化の過程 — セントラル・ブッシュマンの事例から —」 伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学 — アフリカに生きる —』アカデミア出版会, 313-348 頁。